

地域社会に溶け込んだ かけがえのない存在に なることを目指して

国際石油開発帝石株式会社
代表取締役社長

北村 俊昭

事業活動を通じて経済発展、社会発展に貢献する当社の姿勢を、社長へのインタビューを通じてお伝えします。



2012年度はCSR経営強化に向けて大きな舵取りをした年だと思いますが、1年を振り返りどのような変化や手応えを感じていますか。

中長期ビジョンに基づくCSR経営の実践

2012年5月に公表した中長期ビジョンでは、3つの成長目標と3つの基盤整備を明示しました。そのなかでCSR経営の持続的強化にコミットしたことは、社内外にCSR経営についての当社の姿勢を明確に示すものです。

2012年度は新たに私が委員長を務めるCSR委員会を設置し、5つのCSR重点テーマを特定することで、全社的にCSR経営を推進する基盤をつくることができました。

CSR重点テーマの1つとして、プロジェクトを実施する地元地域社会との良好な関係づくりを位置づけていますが、2011年および2012年にイクシス LNGプロジェクトのLNGプラント建設地であるダーウィン市近郊に住む方々を対象として実施したアンケートでは、イクシスLNGプロジェクトを85%の方が歓迎しているという回答が得られました。プロジェクトが多く雇用を創出し、地域経済に貢献している点などが高い評価の要因と思われる。

コントラクターとともに高めるHSEの取り組み

当社が進める各プロジェクトには、コントラクターをはじめとする一次、二次請負業者など多くの関係者が携わっており、その全員が同じようにCSRへの意識を共有することが重要です。たとえばHSE*1の取り組みです。

2012年11月、当社が日本企業として初めてオペレーターを務めるオーストラリアのイクシスLNGプロジェクトに携わるすべてのコントラクターおよびサブコントラクターのCEOを集めて開催した「HSE CEO Forum」では、当社と各社が共同でHSEの取り組みを推進していくことを確認しました。あるコントラクターからは「INPEXとの仕事を通じて自社のHSEへの取り組みレベルが上がってきた」という声も届いています。当社の考え方を明確にしたことによる変化は確実に進んでおり、各地域・各方面における反応にも確かな手応えを感じています。

ダイバーシティ・マネジメントへの取り組み

また、イクシスやアパティといったオペレータープロジェクトでは、さまざまな国籍や文化を持った従業員が働いており、ダイバーシティ・マネジメント*2が重要な課題となっています。他方、日本国内では、本社をはじめ、女性の活用などダイバーシティ・マネジメントは十分に実践できていないのが現状です。今後の大きな経営課題として積極的に取り組んでいく所存です。

グローバルに活躍する従業員の支援

2013年2月にオーストラリア・パース事務所において、イクシスLNGプロジェクトに従事する1,150名を対象に実施したINPEXに対する意識調査によると、石油・ガス業界の平均よりも従業員の職場満足度が高いという結果が出ています。特に安全管理やダイバーシティ、社会的責任、人を大切にする文化、といった項目の評価が高く、このことは高いCSRの意識のもとでプロジェクトが進められている表れだと思います。

当社では中長期ビジョンの基盤整備の一つである「人材の確保、育成の効果的な組織体制」の実現に向け、2012年にグローバル人事調査・企画グループを設置しました。また、グループ設置後の最初の取り組みとして「INPEX HR VISION」を策定しました。これに基づき、グローバル企業にふさわしい人事制度・システムの積極的な導入を進めていきます。

*1 HSE：健康（Health）、安全（Safety）、環境（Environment）

*2 ダイバーシティ・マネジメント：一人ひとりの多様性を認め、個人々々を生かす形で仕事や人事制度を構築する仕組み



オーストラリアの「イクシスLNGプロジェクト」が開発フェーズを迎え、インドネシア「アバディLNGプロジェクト」でも施設の基本設計作業が開始されました。この2大プロジェクトが日本のエネルギー市場に与えるインパクトや当社のCSRのなかで持つ意義について教えてください。

2大プロジェクトでエネルギーの安定供給に貢献

イクシスLNGプロジェクトでは、年間840万トン生産するLNGの7割を日本の電力・ガス会社へ、15年間にわたって供給することが決まっています。アバディLNGプロジェクトの年間生産量250万トンと合わせると、日本の年間LNG輸入量の10-15%相当の規模です。資源・エネルギーをいかに確保するかは、日本の大きな課題であり、安全保障上のリスクが比較的低い両プロジェクトは、エネルギーの安定供給に大きく貢献できるものと確信しています。

積み重ねた経験で得られた相手国からの信頼

当社がオペレーターとしての経験を積み、技術力や資金調達力における実績とともに、環境や雇用など地域社会との関係づくりに対する信頼を築くことは、いわば、当社の石油・天然ガス開発企業としてのブランド価値につながります。「日本にはINPEXという信頼できるオペレーターがいるので、このプロジェクトはそこにやってもらおう」、「こういう会社と一緒に組もう」という声につながり、世界のさまざまな石油・天然ガス開発にかかわる機会がますます増えていくという「良い循環」が期待できます。事実、最近では世界各地のさまざまなプロジェクトに声をかけていただけるようになっており、イクシスとアバディでのCSRの取り組みが当社ブランド価値を高め、新たな信頼獲得につながっていることを実感しています。



グローバルに事業活動を展開する会社として、国際社会からの要請に基づいたCSR活動をどのように推進していますか。

大切なのは“思い”を伝え合うコミュニケーション

当社の事業は、地域社会や地球環境に対して一定の負荷を与える業種であり、グローバルな視点での十分な配慮が欠かせません。当社では、国連グローバル・コンパクト、EITI*³ やIPIECA*⁴ など、CSRに関する国際的なイニシアティブに参加するとともに、オペレータープロジェクトにおける社会・環境面での対応は、IFCパフォーマンススタンダード*⁵ を自主基準とし取り組んでいます。しかし、国際基準の採用は、CSRの出発点にすぎません。

各プロジェクトでの具体的な取り組み紹介は後続ページに委ねますが、大切なのは、地域社会とどのように共生し、互いに成長していくかです。プロジェクトが大きくなるほど、さまざまなステークホルダーとのかかわりが増えます。そこには文化の違いがあり、価値観の違いがありますが、大切なのは「思い」を伝え合うことができるコミュニケーションです。私は、社会との関係づくりにおいて、日本企業はすぐれたものを持っていると思っています。相手を思いやり、話をよく聞き、対話し、約束を守るという文化が根付いています。

現在、当社が各プロジェクトにおいて進める活動では、このステークホルダーとの「思い」の共有を実現しながら、経験と成果を着実に積み重ねることができています。この財産によって、既存プロジェクトの活動をさらに深化させるとともに、ほかの新しいプロジェクトにも受け継ぎ、INPEXとしての確かな強みへと成長させていきたいと思っています。

*3 EITI (Extractive Industries Transparency Initiative) : 採取産業透明性イニシアティブ

*4 IPIECA (International Petroleum Industry Environmental Conservation Association) : 国際石油産業環境保全連盟

*5 IFCパフォーマンススタンダード : IFC(International Finance Corporation=国際金融公社) が定める社会と環境の持続可能性に関するパフォーマンススタンダード



中長期ビジョンに掲げている「再生可能エネルギーへの取り組み強化」については、どのように取り組まれていますか。

多様な再生可能エネルギーへの取り組み

将来のエネルギーを創るという社会的責任と、再生可能エネルギーというポテンシャルが当社自身の将来の発展に必要な不可欠であるという2つの視点から、再生可能エネルギーに取り組んでいます。

具体的には2013年3月、国内事業の拠点である新潟県において出力約2,000キロワットの「INPEXメガソーラー上越」を設置・稼働させています。

さらに、再生可能エネルギーのなかでも有力な地熱発電に注力し、北海道と秋田県で事業化調査に着手しています。地熱発電は、石油・ガス田開発で培ってきた探査、掘削、評価など技術面でのシナジー効果が高く、当社の強みを生かせます。アバディLNGプロジェクトが進むインドネシアなど、地熱資源に恵まれている諸国に対して、今後オペレーターとして貢献していくことも視野に入れていきます。

また、水素エネルギーやメタンハイドレート*⁶ など、将来を見据えたイノベーションにも、積極的に取り組んでいきます。エネルギーの安定供給を目指す当社にとって、さまざまなリスクに備えるためにも、新たなエネルギーの開発は重要なミッションです。30~50年という長期的視野でその可能性を見つめ、この分野を担う企業としての社会的責任を果たしていきたいと思っています。

*6 メタンハイドレート : 天然ガスの成分であるメタンが水と結合し、水和物となってできたシャーベット状の固体結晶



最後に、事業が成長していくにつれ、さまざまなステークホルダーやグローバル社会からの期待の高まりを強く感じると思われますが、どのように対応すべきとお考えですか。

かけがえのない存在になることを目指して

私たちの事業は、プロジェクト実施地域において、長い間操業していくことになります。そのなかで目指していくのは、それぞれの社会、経済的発展を支える主要な構成メンバーとして、地域に溶け込んだ、かけがえのない存在となることです。

また、人材面でもその地域に深く溶け込み、さらにコミットしている人が責任を担う体制を構築していく必要があるでしょう。そういったより広く、より深い責任を果たせる人材は一朝一夕に育ちませんが、しっかりと取り組んでいく所存です。